英語コミュニケーションコースに適した学修到達及び成果の評価のあり方に関するFD研究開発プロジェクト

研究代表者　メベッド シェリフ　（法学部）
共同研究者　今村　潔　（経営学部）
ホワイト ショーン アラン（経営学部）
ロザーティ サイモン　（経済学部）
吉本　圭佑　（政策学部）

2018 年度の教養教育・学部共通 FD 研究開発プロジェクトについて報告し、今後の課題等につて述べる。今年度の FD プロジェクトは前年（2017 年度）から引き続き、英語コミュニケーションコースの成果を測定する方法を探ることが目的である。まず、学生の学習の成果を査定し、評価することが第一段階であると考え、学生がコースに入る時（4 セメ）から、卒業までの 2 年半の間、英語能力と文化理解という二つの面を図る水準を設けることが狙いの一つである。この二つの側面は、英語コミュニケーションコースの「学生に保証する基本的な資質・能力」に基づいている。

学生に保証する基本的な資質・能力（2019 年度入学生対象）

1. 英語圏での日常生活に支障のない英語の技能を身につけている。
   英語圏の言語や文化を理解し、国際的視野を備えている。
2. 異なる文化や価値観を理解した上で、英語で他者と意見交換できる柔軟な思考力、表現力を身につけている。
3. 自らもしくはチームで目標を定め、英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができる。

今年は主に 1. の要素に集中し、学生の「英語圏での日常生活に支障のない英語の技能」を伸ばしているかどうかの測定方法を探ってきた。今年度の FD 研究はあくまで方法の確定に向けたもので、学生の実際の捗りを測ることは来年度以降の課題である。本 FD プロジェクトの最終的目標はコースの成果を評価することであり、その成果は学生の学問的な進歩に現れるだろうという前提にあるため、学生の英語能力の進歩を評価する方法を見てみたいと思う。

まず、学生は 4 セメから 8 セメまで、一連の授業を受けることが定められている。4 セメから、スポークン・イングリッシュの急速な上達を実現させるため、「Oral　Communication」という授業を週に 4 コマ（6 時間）受講する。そして、主に 5 セメから英語で世界の文化を中心とする演習と講義を受講し、英語を学ぶだけではなく英語でアメリカやイギリス等の文化そして世界の事情を学ぶことになっており、やがてゼミで一層専門的な研究を選んで学ぶ。最終的に卒業論文を

書き、高校の時に想像できないほどの長い論文を英語で書くことになる。もちろんそれぞれの授業で教員が成績をつけ、学生の学問的能力を評価する。しかし、教員の間で正式的な評価の基準はなく、それぞれの授業の達成する目標はその授業を担当する教員が自分で決定しているため、学生の伸び率が客観的ではなく、英語コミュニケーションコース全体の資質（成功）を測るため、足りない部分がある。そのため、学生がコースを経て、英語の能力が伸びているかどうか、文化の理解が深まっているかどうか、そしてその伸びと深みの程度も測ることができたら、今後の教育の質を改善するために用い、よりよいプログラムを組み立てることができると考えられる。

そこで、検定試験という測定について考える。学外の評価方法を用いて学生の英語能力を測るという方法が前からある。本プログラムでは、CASEC（Computer Assessment System for English Communication）を受験させて、スコアの推移を把握している。これまではコース応募者一度受け受検（３セメの終わり）。再び、コース所属開始から１年経ったところでテストを受検している。しかし、より正確に学生の伸びを把握するために 2019 年度から、７セメの最後に、３回目の CASEC を実施することに決めた。そうするとより長期的な学生の伸びが確認できる。

このように工夫しているが、CASEC は英語コミュニケーションコースの内容と異なる英語の側面を査定しているということが指摘できる。つまり先に触れたようにスピーキングを中心とする「Oral　Communication」の授業は週に６時間を占めているに対して、CACEC はリスニングとリーディングの２技能のみのテストであり、スピーキングやパーソナルコミュニケーションの能力は全く評価の対象になっていない。文化理解のような問題も対象外である。リーディングとリスニングの面では CACEC は学生のレベルを測る便利ツールではあるが、本コースで行っている多面的な国際コミュニケーションの資質を測るには CACEC 以外のツールも必要であると思える。

現在、プレゼンテーション能力はビジネス界やアカデミック界に必要とされており、コースの多くの教員はプレゼンテーションを取り入れている。また、それぞれのクラスの間の交流を深めるように、2018 年度からア組、イ組、ウ組、エ組の合同発表会を行なっている。これは、それぞれのクラスの担当教員のプランニングと協力によって実現しているが、英語能力の異なるレベルの学生が、研究してきた学問の内容をうまく伝えられるかどうかを評価できる。今後、毎年の英語コミュニケーションコースの行事の一つとして行うことを決めた。その結果について、Oral Communication Course Poster Presentations の報告書を作成している。コースの資質と学生の伸びを測る材料と考えている。

また、今回の FD プロジェクトで英語能力の発展を確認できる方法として注目したのは、CEFR(ヨーロッパ言語共通参照)という学習者の習得状況を評価するために用いられるガイドラインである。CEFR は学生のレベルを図るように、英語やその他の言語を用いて、何ができるかという様々な語学的活動を細かくリストアップしている。リストの一部を以下に記す。

カテゴリーコード	CEFRレベル	一般的日本語訳	小学生児童向けの訳
IS3	B1	長い会話や議論を維持することができるが、ときに自分の考えを伝えるときに少し助けが必要な可能性がある	
IS3	B1	驚き、幸せ、悲しみ、関心、無関心といった感情を適切に表現したり、そういった感情に適切に反応することができる	
IS3	B2	想定内もしくは想定外でも専門的なもしくは文化的な話題に関する会話に積極的に参加することができる	
IS3	B2.2	十分な流暢さ、自然さ、適切な使用域の言葉遣いで一般的な話題に関する会話に十分に参加することができる	
IS3	B2	感情をかなりの程度伝え、出来事や経験に関する個人的な重要性を強調することができる	
IS3	C2	社会的かつ個人的な生活をおくるにあたり、どんな言語的な制約にも悩まされることなく、快適に適切に会話することができる	

上記のリストに B1，B2 といった CEFR のレベルが左に表記され、その右に各レベルでどのようなコミュニケーションができるということが明記されている。2018 年度後期開始時（9 月）に、学生に配布し、表記に出ている項目を見て、できる活動に丸を打つように指導し、自分の現在のレベルを自己評価させた。そして、学期の終結に近い 1 月に再び自己評価をさせた。同じ用紙を使うため、学生は自分の目で、どのように力が伸びたかについて確かめられる。リストのもう一つのメリットは、シラバスを構成の際、学生のできないことをすぐ発見できる。今後、どこに力を入れるべきかが分かる。ある学生（エ組）は、9 月に自分のレベルが A1.3 の辺りにあると評価した。そして、後期の最後の方にそのレベルが A2.1 まで上がったと評価した。このような自己採点は、成績に取り入れていないが、学生と相談する時に今後の学習計画に役立つ資料として用いることができ、全員の CEFR-J の can-do リストを元にし、英語コミュニケーションコースの出来映えを図ることができると考えている。

CEFR の使い方と応用の仕方をより理解するため、今年度書物も購入した。そして、他大学で CEFR を使っている教員を招き、講演会を開いた。講演者は福井大学の英語教員、ベッチェ　ニコランジェロ氏（総合地域学科）とヘネシー　クリストファー氏（国際地域学科）である。両氏は、福井大学新入生の英語科目のレベル分けテストを担当している。そのテストで、CEFR-J の Can-do リストに基づいて作っている。テスト自体は、主にインタビューテストであり、テストの内容の説明をし、実際の映像も見せてもらった。その後、CEFR に基づくテストのメリットについて話した。今回の講演会は本学専任教育教員の今村潔経営学部教授、ロザーティ　サイモン経済学部教授、メベッド　シェリフの三人と、オルヴァ　ロベット　イジオンドン非常勤講師が出席した（ホワイト　ショーン　アラン経営学部准教授は国外研究員のため欠席）。また、ディスカッションでベッ

チェ氏とヘネシー氏は、カリキュラムの計画を CEFR-J に基づくことやそのほかの英語プログラムの特徴について話してくれた。

今後、CEFR-J の can-do リストを使って、担当するクラスの平均のレベルをセメ毎に記入し、学生の英語能力の発展を監視するようにシステムを設置する予定である。また、それぞれのレベルに明記されている学習の目標をリストに参考し、カリキュラムを構成していくように心がけると、学生のためになる英語教育の提供に役立つと考えている。

コミュニケーションと文化

英語コミュニケーションコースは次の「学生に保証する基本的な資質・能力」に基づき、学生のコミュニケーション能力を育成するために、教育課程を設定している。

学生に保証する基本的な資質・能力（2019 年度入学生対象）

『「知識・技能」の修得』

英語圏での日常生活に支障のない英語の技能を身につけている。

英語圏の言語や文化を理解し、国際的視野を備えている。

『「知識・技能を活用して、自ら課題を発券し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力（「思考力・判断力・表現力」）」の発展・向上』

異なる文化や価値観を理解した上で、英語で他者と意見交換できる柔軟な思考力、表現力を身につけている。

『主体性をもって多様な人々と協働する態度（「主体性・多様性・協働性」）の発展・向上』

自らもしくはチームで目標を定め、英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができる。

コミュニケーション能力は、言語能力だけではなく文化（異文化、自文化）についての知識や態度、及びこれらを適切に応用できる能力も含まれている。従って、上述の文の下線の部分のように、英語コミュニケーションコースの「学生に保証する基本的な資質・能力」には文化に関するものが含まれている。教育評価の一部としては、卒業式後のコース修了証書授与式の時に修了生に次のアンケート＜2015 年度入学生（2018 年度卒業生対象）＞に回答してもらうが、これで客観的に測れない部分もある。

＜2015年度入学生対象（2018年度卒業生）＞

「学生に保証する基本的な資質」に関する意識調査

英語コミュニケーションコースでは、「学生に保証する基本的な資質」を設定し、本コースの教育を通じて、学生の皆さんが身につけることができる資質や能力を明示しています。
本調査は、本コースの教育改善を進める上で、学生のみなさんが、これらの資質や能力がどの程度、身についたと実感しているのかを調査するものです。
ご協力くださいますようお願いいたします。

＿＿＿＿＿＿＿＿学部　＿＿＿＿＿＿＿＿学科

あなたは、英語コミュニケーションコースが設定している「学生に保証する基本的な資質」について、その内容をご存知でしたか。 A:知っていた　B：知らなかった	A	B

各質問項目について、A～Dのいずれかを選択してください
A:かなり実感している　B：ある程度実感している　C：あまり実感していない　D：全く実感していない

	質問項目（※英語コミュニケーションコース 「学生に保証する基本的な資質」）	A	B	C	D
1	**「英語圏の言語や文化の理解をもとに、国際的視野を備えている。」** これについて、あなたは身についたと実感していますか？	A	B	C	D
2	**「異なる文化や価値観を理解した上で意見交換できる柔軟な思考力を身につけている。」** これについて、あなたは身についたと実感していますか？	A	B	C	D
3	**「英語および異文化に対する興味・関心を持っている。」** これについて、あなたは身についたと実感していますか？	A	B	C	D
4	**「異なる文化や価値観を理解しようとする探究心を持っている。」** これについて、あなたは身についたと実感していますか？	A	B	C	D
5	**「自ら目標を定め、その実現に向けて自律的に学習することができる。」** これについて、あなたは身についたと実感していますか？	A	B	C	D
6	**「仲間と協調して学び、働く能力を身につけている。」** これについて、あなたは身についたと実感していますか？	A	B	C	D
7	**「積極的に英語を用いてコミュニケーションを図る姿勢を身につけている。」** これについて、あなたは身についたと実感していますか？	A	B	C	D
8	**「英語圏での日常生活に支障のない英語の4技能（読む・聞く・話す・書く）を身につけている。」** これについて、あなたは身についたと実感していますか？	A	B	C	D

それぞれの授業レベルでは（英語圏の言語や文化に関する知識等）のものに関する教育効果の評価は、授業担当者による成績評価に伴う単位取得で行われると考えていいかもしれないが、現在の仕組みではまだ十分に測れないものもある。

また、「文化理解」、「国際的視野」、「柔軟な思考力」、「異なる文化や価値観を理解」、「積極的にコミュニケーションを図る」などは、「異文化理解能力」・「異文化対処能力」と呼ばれるが、専門的に見ると、次のような定義及び要素がある。

異文化理解能力の主な基本定義

提唱者	定義
Baumer	ある課題の異文化的側面を知覚し、適切に対応することは異文化コミュニケーション能力である。
Hanekamp	異文化コンテクストにおいて、適切にふるまう能力
Deardorf	異文化コンテクストにおいて適切かつ効果的に対応できる能力
Koppel	異文化的場面において、適切かつ効果的に対処する能力
Meierwert	自分自身と他者に対する文化的知識に基づき、他者と効果的に共同作業を行う後天的能力

ケンパー (2010) の「異文化能力の概念化と応用」（竹内、2012より引用）

異文化理解能力の構成要素

態度	知識	比較、解釈するスキル
他者への関心を持ち、オープンである	自らの所属する集団、及び他者の所属する集団に関する知識がある	解釈力ー様々な事象、物事、文書等を比較、解釈し、関係付けられる
新しいことを学習する際の積極性や前向きな姿勢がある	社会レベルや個人レベルで他者との的確なインターアクションに関する知識がある	発見力ー未知の知識の場合、それを見つけ出し、既知の知識と関連性を持たせられる
他者の信念や行動に関して直ちに判断を下すことなく、好奇心を持ち、理解しようとする気持ちがある		
他者の視点から物事を理解・分析しようと努める気持ちがある		

Byram (2007) の “Model for Intercultural Communicative Competence”（竹内、2012より引用）

以上のことを踏まえ、「異文化理解能力」・「異文化対処能力」の評価（測定）に関する文献調査を行った。その結果、数多くの尺度と評価法が存在していることが分かった。以下の表は特に注目が付いたものとそのポイントが簡単にまとめられているものである。

「異文化理解能力」・「異文化対処能力」の評価方法					
種類	名	費用	日本語対応	備考	参考
心理測定	Intercultural Development Inventory (IDI)	有料	有	尺度1部が日本人に適していない研究結果も	山本・丹野、2002；山本、2014
	Global Perspective Inventory (GPI)	有料	無	日本語対応していない	Braskamp et al., 2014
	Beliefs, Experiences and Values Inventory (BEVI)	有料	有	異訳・日本人・日本文化に適していない意見	Shealy (ed.), 2016; 西谷、2018
	Intercultural Adjustment Potential Scale (ICAPS)	有料	有	留学経験者・予定者対象	Matsumoto et al., 2001; 笠原、2012
	Cultural Intelligence Scale (CQS)	無料	無	日本語対応していない	Ang & Van Dyne, 2009
	沼田2010；2012尺度	無料	有	複数先行研究の複合尺度	沼田、2012
CEFRに基づく評価	European Language Portfolio (ELP) Intercultural Experience and Awareness	無料	無	異文化に関するポートフォリオ振り返り	Little & Simpson, 2003
	Intercultural Competence Assessment (INCA)	無料	無	異文化アンケートとタスク（シナリオ・ロールプレイ）に基づく評価	Byram, 1997; INCA, 2004
	異文化間能力指標	無料	有	知識・態度・思考スキルの"Can-Do"（自己）評価	松本、2013

表に書かれているように、検討しなければならない要因が幾つかあり、単年度で十分に検討することは不可能であった。種類の選択もしくは自作の可能性、予算、言語の取り扱い方法の他にも、適性などを検討する必要がある。これを今後の課題にする予定だが、現在のところ特に参考にしたいものの一つは松本（2013）の「異文化間能力指標」である。その理由は、既に本プロジェクトでは、学生の発信型言語能力の評価を CEFR（Common European Framework of Reference＝ヨーロッパ言語共通参照枠）に基づく同じ「Can-Do」方法を試行で開発しているところである。松本氏は、異文化間能力を「知識面＝言語と文化」・「態度面」・「思考スキル面」に分け、全部で 29 項目の「Can-Do Statements」（能力記述文）アンケートを作成した。ここの限られたスペースで全て引用することができないが、以下に幾つかの例を紹介できる。

松本（2013）の異文化間能力Can-Do Statementsの例		
知識面＝言語と文化	態度面	思考スキル面
1）学習している外国語の基本的なルール（発音、文法、語法）や表現の特徴などを知っている	1）異なる言語や文化との共通点・相違点に注目し、それを自然に（当たり前のこととして）把握し受け入れることができる	1）異なる言語や文化についてそれを構成する要素（＝構成要素）を客観的に観察・把握し、自分なりに分析するこ とができる
2）その外国語についての歴史的、社会的、文化的な背景知識を持ち様々な場面や状況に応じた使い分けが必要 なことを知っている	2）言語や文化の違いに対する抵抗や偏見を捨て、自分とは全く違う考え方も、また理解に苦しむような「中間的な曖昧さ」も受容できる	2）異なる言語や文化について、その構成要素をカテゴリーやジャンルに基づいて体系的に把握することができる
3）その外国語を習得する方法やストラテジー（方略）についての知識があり、ストラテジーの効果は、その言語に対してポジティブな見方ができるかどうかに左右される（ことを知っている）	3）学校教育の場だけでなく、常に他の言語や文化に興味を持ち、自ら進んで異文化コミュニケーションの状況に入っていくこができる	3）異なる言語や文化について、その構成要素を一貫した手順に基づいて比較し、類似点と相違点をきちんと把握 することができる
4）・・・ など	4）・・・ など	4）・・・ など

まとめ

本報告書において、2018 年度の FD プロジェクトにおいて、コースの改善に向けて学生の能力の成長そして学生の国際理解の発展を測るため多面的なアプローチを紹介した。FD 研究の成果を教員同志で議論し、それらのメリットとデメリットを考察し続けている。また、FD の研究の結果を基にして、カリキュラム、つまり授業の中で何を教えるかという重要な問題を考える上で必要な情報を集めている。しかし、教育では、「変化」は難しい。新しい教育の概念はファッションのように次々と現れて、消えていく。新しい手法などを容易に取り入れることは危険である。今後、しっかりとこれらの新しい概念を検証し、専任教員のみならず非常勤の意見も聴き、どのように英語コミュニケーションコースを変えていくかということについて考えていきたいのである。

以上

参考文献

Ang, S. and Van Dyne, L. (2009). *Handbook of Cultural Intelligence: Theory Measurement and Application*. London: Routledge.

Braskamp, L. A., Braskamp, D. C., & Engberg, M. E. (2014). *Global Perspective Inventory (GPI): Its purpose construction, potential uses, and psychometric characteristics*. Chicago: Global Perspective Institute.

Bryam, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Cleveton: Multilingual Matters.

Intercultural Competence Assessment (INCA) (2004). *INCA Assessor Manual*. https://ec.europa.eu/migrant-integration/?action=media.download&uuid=2A9DB42F-D7FD-A01C-366EC5B7FBB3462B

笠原 正秀 (2012) 留学の成否と異文化適応力測定テスト (ICAPS) 構成因子との関係性。『椙山女学園大学国際コミュニケーション学部 研究論集「言語と表現」』9, 63-71.

Little, D. & Simpson, B. (2003). *European Language Portfolio: The Intercultural Component and Learning How to Learn*. https://www.unap.ro/en/unitati/dls/bio_en.pdf

Matsumoto, D., LeRoux, J. A, Ratzlaff, C., Tatani, H., Uchida, H., Kim, C. & Araki, S. (2001). Development and validation of a measure of intercultural adjustment potential in Japanese sojourners: The Intercultural Adjustment Potential Scale (ICAPS). *International Journal of Intercultural Relations*, 25, 483-510.

松本 佳穂子 (2013) 異文化間能力の指標と指導モデル構築の試み (アイデンティティの多様性と共生(コアプロジェクト 1))。『文明』18, 51-63。

西谷 元 (2018) 留学体験の客観的測定 ―BEVI を用いて―。『大学時報』 380, 74-79。

沼田 潤 (2012) 日本人大学生における異文化理解の現状。『人間環境学研究』10(2), 55-63。

Shealy, C. (2015). *Making Sense of Beliefs and Values: Theory, Research, and Practice*. Springer Publishing, New York.

竹内 愛 (2012)「異文化理解能力」の定義に関する基礎研究。『共愛学園前橋国際大学論集』12, 105 - 112.

山本 志都・丹野 大 (2002)「異文化感受性発達尺度(The Intercultural Development Inventory)」の日本人に対する適用性の検討 : 日本語版作成を視野に入れて。『青森公立大学紀要』 7(2), 24-42。

山本 志都 (2014) 文化的差異の経験の認知異文化感受性発達モデルに基づく日本的観点からの記述。『多文化関係学』 11, 67-86。